

第 25 回

「自画像」

横尾忠則（よこおただのり）

アクリル、キャンヴァス　100.2×99.9㎝　1983年
横尾忠則現代美術館蔵（兵庫県）

※高等学校『美術1』P.35に掲載

心で感じる色

小学生の頃、美術の授業でひまわりの絵を描きました。花を観察しながらクレヨンで描くのですが、私はひまわりの黄色い花びらをオレンジ色や赤色で描いてみました。すると私以外のみんなは黄色で描いていたので、友達に、どうしてその色を選んだの？と不思議そうに聞かれました。「いろんな色で描いたほうが、ひまわりが嬉しそうだから」と答えると、その友達には笑われてしまったのですが、絵は実際に見えた色でなくとも、そのときに感じた色で自由に描いても良いのだと私は思っています。

横尾忠則さんの自画像は、色鮮やかで勢いのあるマチエールが巨大なキャンバスの中で今にも動き出しそう。気迫に満ちた複雑な表情は、喜びか、悲しみか？見ている私たちの想像を掻き立てます。揺れる感情が極彩色で表現され、制作過程はきっと色彩の旅をするような感覚だったのではないでしょうか。

自画像は私もこれまでに油絵やアクリルガッシュでも描いたことがありますが、この作品を眺めたとき、また改めて描いてみたいと思いました。見たままの自分を模写するのではなく心で感じた色で……。私自身をどんな色で描くのだろうとワクワクします。

普段からアートを見ることが好きな私は、絵画は鑑賞時に二つの視点で眺めるようにしています。最初は感じるままに「わぁ……！」なんて、ときどき声も出しながら。そしてじっくり堪能した後、作品の作家になったつもりで絵画を心でなぞり、どこから描きはじめたのだろう？どんな気持ちでこの色を選んだのかな？とプロセスを想像し楽しむのです。私にとって絵画を眺めることは、まるでアトラクションのように絵を描く擬似体験をくれる特別な瞬間。素晴らしい絵画たちは鍛錬されたテクニックと合わせ、作家の心情が生き生きと宿っているからこそ心震えるのです。

皆さんはこれまでに自画像を描いたことはありますか？もし描く機会があれば、素直に感じた色で自分を描いてみてもおもしろいかもしれません。心で視（み）えた色は自分だけが表現できる自由な世界なのですから。

篠原 ともえ
しのはら・ともえ

1979年東京都生まれ。デザイナー、アーティスト。
文化女子大学短期大学部
服装学科デザイン専攻卒。
1995年歌手デビュー。メディアでの活動を経て、
現在はデザイナーとして創作活動を続け、
松任谷由実、嵐など、アーティストの
ステージ衣装などを手がけている。
また、2022年には、デザイン・ディレクションを
手がけた革きものが、ニューヨークADC賞（銀・銅）、
東京ADC賞を受賞。